

# 教職の魅力向上への課題に関する調査研究

## 1 研究の目的

令和3年度、大学生の教職に対する意識調査を通して教職の魅力向上のための課題を発見するとともに、教職志願者増加のための方法や施策について検討し、愛知県の教育の質の維持・向上を図ることを目的とした研究を行った。

今年度は、夢や理想をもって教職に就いた学校教員が、実際に働くことによってどう変わっていったか、どのような使命感をもち続けているかなど、学校現場で働く教職の概観を探り、教職の魅力向上への課題を明らかにするとともに、教職の更なる魅力向上に対する有効な施策を行うための基礎資料の一つとして活用する。

## 2 調査対象・方法・内容

### (1) 調査対象

本センターで行う幼稚園、小・中学校、義務教育学校、高等学校、特別支援学校の初任者研修（新規採用教員研修）、2年目教員研修、3年目教員研修において、受講者へアンケート調査を実施した。

### (2) 調査方法・調査内容

Google Formを用いて、選択肢から適するものを選択する方法で回答を求め、10番及び11番に関しては任意回答とし、自由記述とした。

(アンケート1番)「魅力のある仕事」(二つ選択)

(アンケート2番)「学校教員の働きがい」(二つ選択)

(アンケート3番)「学校教員に求められる資質・能力」(二つ選択)

(アンケート5番)「教職を志した理由」(二つ選択)

(アンケート6番)「教職として負担に思っていること」(三つ選択)

(アンケート10番)「教職の魅力は何か」(自由記述)

(アンケート11番)「何が変われば教職に魅力を感じるか」(自由記述)

※ただし、アンケート4, 7, 8, 9番は、志望の時期、校種、受講した研修、性別の設問である。

調査時期は令和4年7月から10月までとし、調査方法はGoogle Formの2次元バーコードを記載した用紙を配付して、オンラインで回答及び収集を行う形とした。

## 3 分析結果と考察

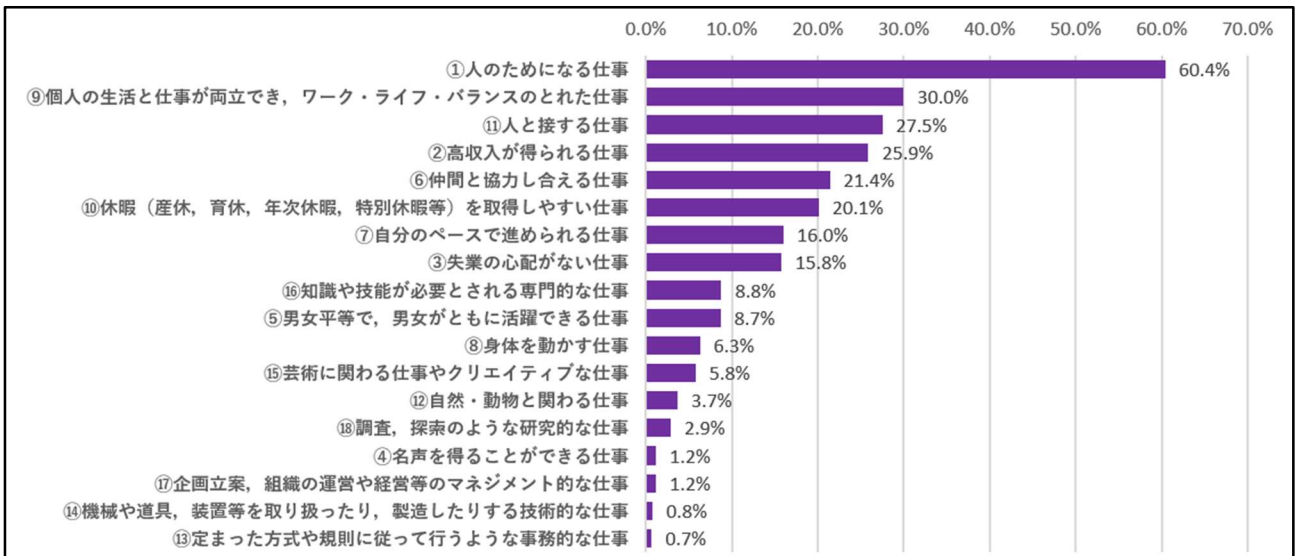
### (1) 仕事の魅力

「魅力のある仕事」(アンケート1番・選択肢から二つを選択)では、学校教員がどのような仕事に魅力を感じるのかについて明らかにすることを目的とした。

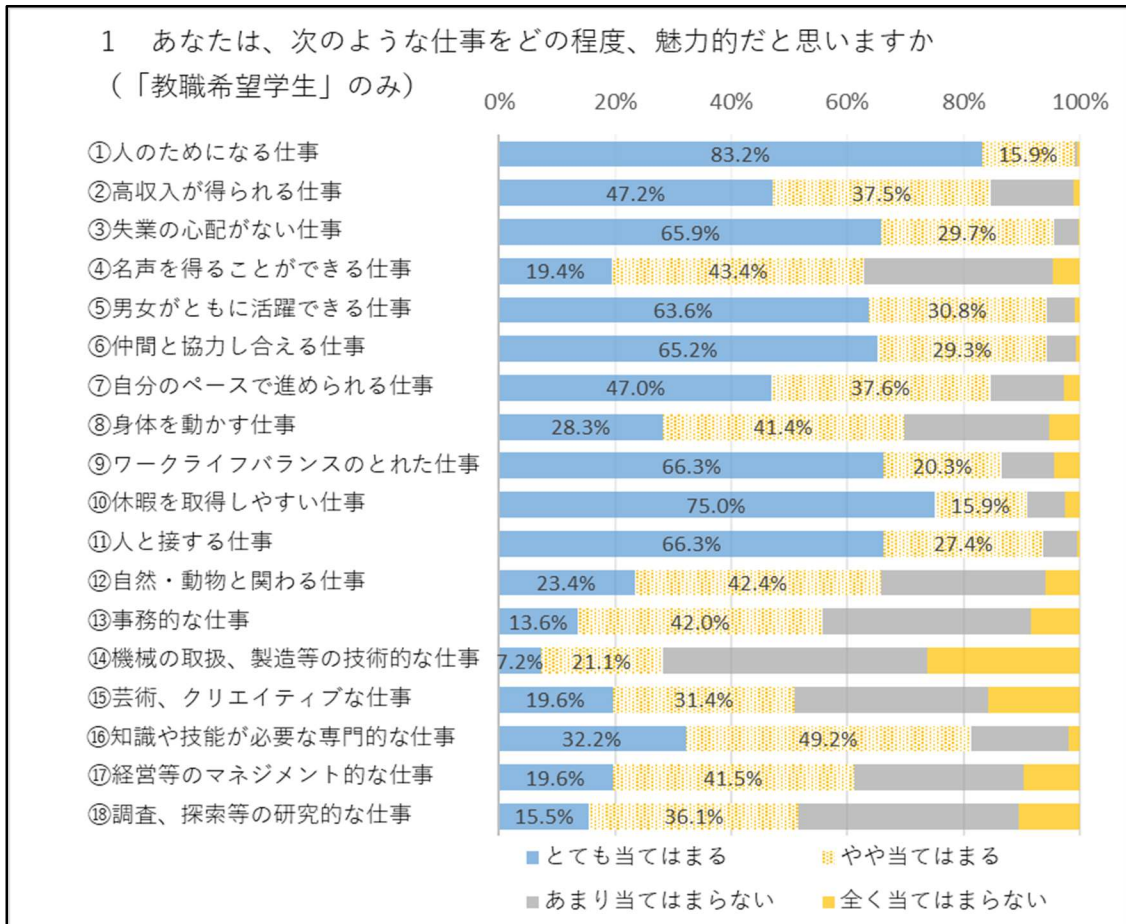
最も多かった回答は「①人のためになる仕事」であり、全回答の60.4%を占めた。2番目に多かった回答は「⑨個人の生活と仕事が両立でき、ワーク・ライフ・バランスのとれた仕事」、3番目に多かった回答は「⑩人と接する仕事」であった(図1)。また、昨年度に行った教職希望学生へのアンケート(四件法で実施)でも、アンケートの回答条件が異なるため正確な比較とは言えないものの「①人のためになる仕事」「⑨ワーク・ライフ・バランスのとれた仕事」「⑩人と接する仕事」の割合が高く

(図2), 教職の仕事の「人と接する, 人のためになる」部分を魅力として捉えていることが分かる。

【図1 「魅力ある仕事」について回答の割合】761件回答



【図2 「魅力ある仕事」について「教職希望学生」の回答の割合】792件回答



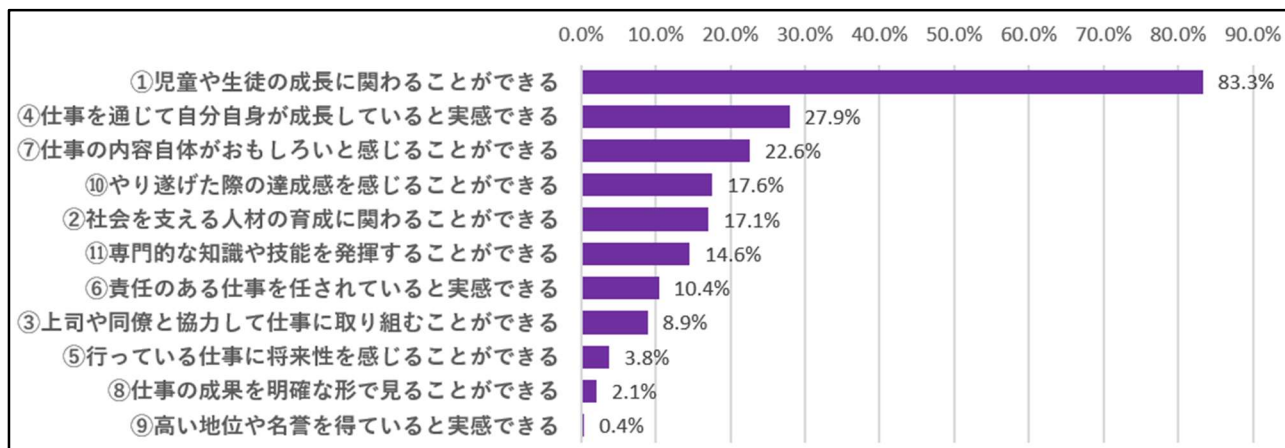
(2) 教職の働きがい

「学校教員の働きがい」（アンケート2番・選択肢から二つを選択）は、教員として実際に働いてみて、どんなことを働きがいとして感じているかについて質問した。

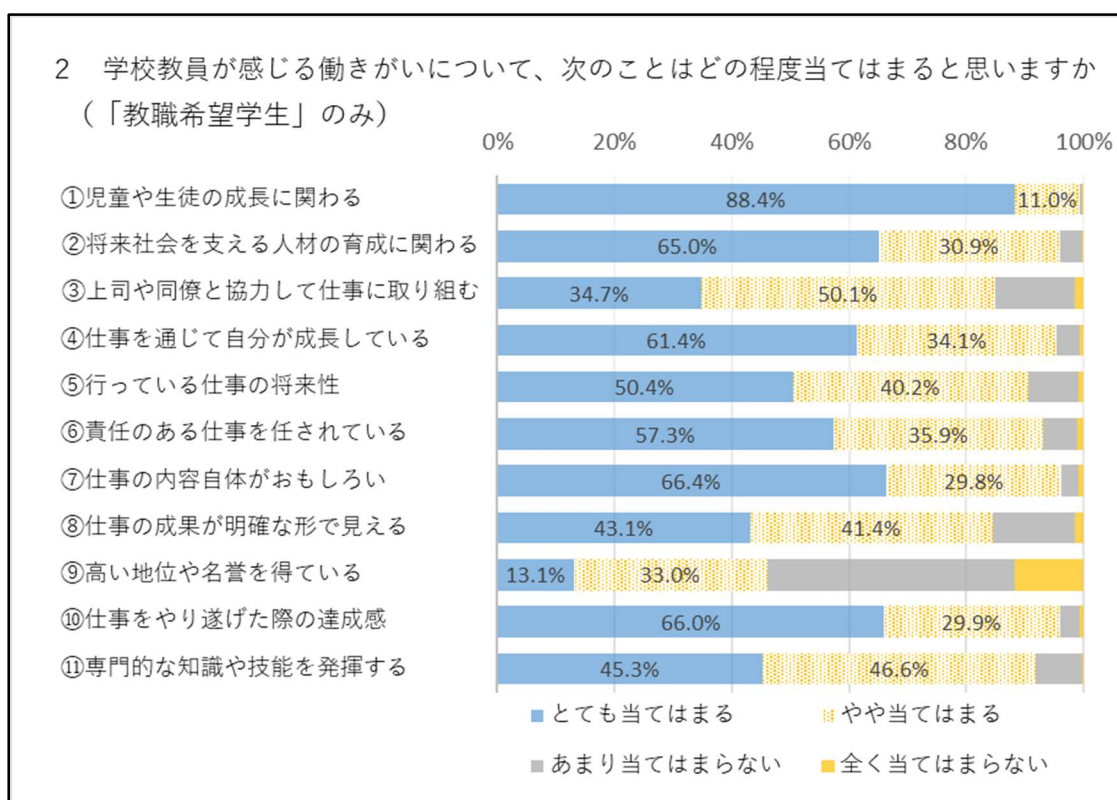
「①児童や生徒の成長に関わることができる」が最も割合が高く、全体の80%を超えている(図3)。昨年度の調査でもこの項目が最も割合が高く(図4)、実際に教壇に立つ教員にとっても、教職を目指

す大学生にとっても、子どもたちの成長に関わることが働きがいと感じていることが分かる。また「④仕事を通じて自分自身が成長していると実感できる」「⑦仕事の内容自体がおもしろいと感じることができる」が続いている。一方、「仕事の成果を明確な形で見ることができる」「やり遂げた際の達成感を感じる」と回答した割合が低い。児童や生徒の成長が仕事の成果であると感じている教員及び大学生が多いことから、児童や生徒の成長を見取るために「評価する力」をつければ、より働きがいを感じるようになるのではないだろうか。また、アンケートの対象である1～3年目の先生方にとっては、教員自身の資質の向上に加えて、「卒業生を送り出した経験」によって、新たに教職の魅力や働きがいを感じる部分もあるだろう。

【図3 「学校教員の働きがい」について回答の割合】761件回答



【図4 「学校教員の働きがい（イメージ）」について「教職希望学生」の回答の割合】792件回答



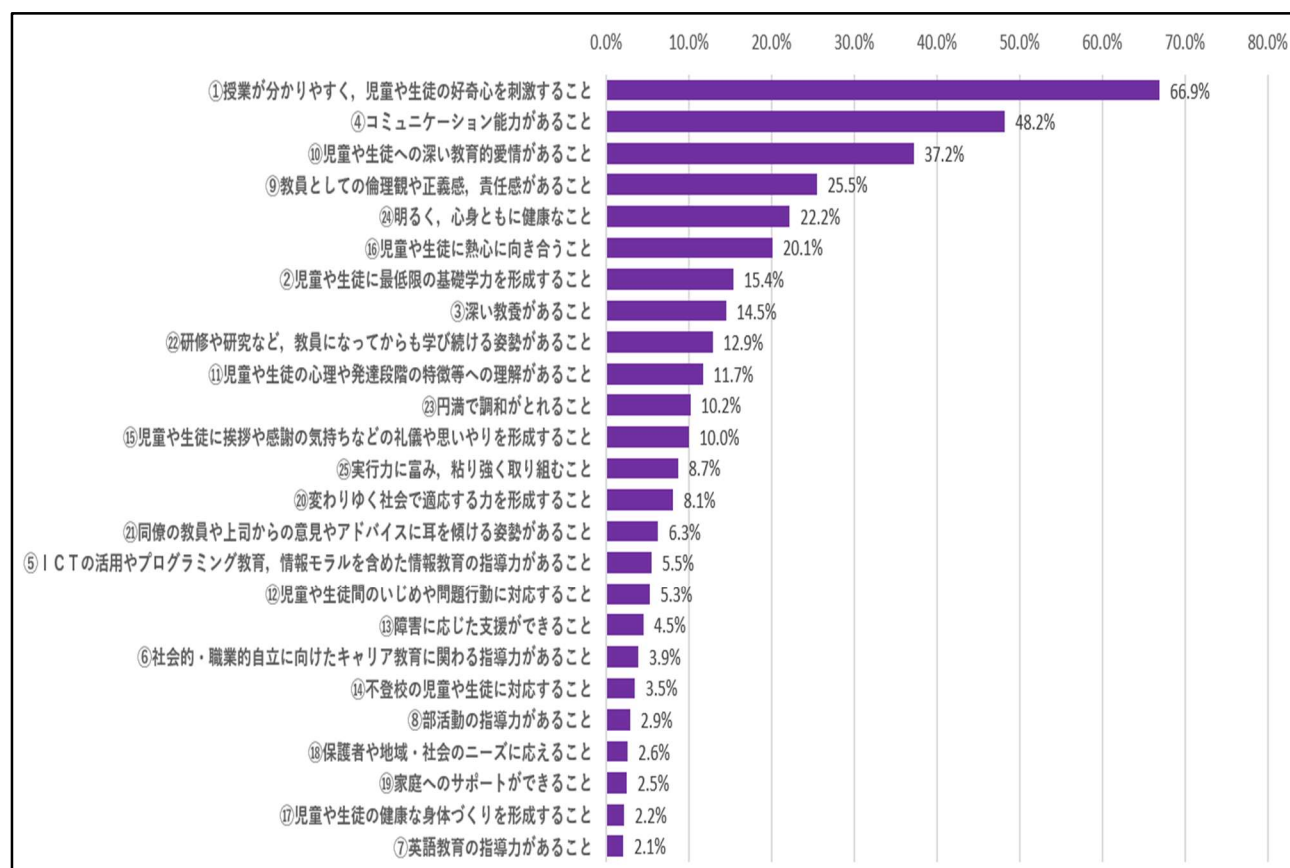
### (3) 学校教員に求められる資質・能力

「学校教員に求められる資質・能力」（アンケート3番・選択肢から二つ選択）では、求められる資質・能力であると考えられるものを選択肢として挙げている。

最も多かった回答は「①授業が分かりやすく、児童や生徒の好奇心を刺激すること」であり、全回答の66.9%を占めた。2番目に多かった回答は「④コミュニケーション能力があること」、3番目に多かった回答は「⑩児童や生徒への深い教育的愛情があること」であった（図5）。実際に授業等で生徒と向き合う中で、「授業の分かりやすさ」や「コミュニケーション能力」「児童や生徒への教育的愛情」が必要だと強く実感しているのではないかと推測される。また、教職希望学生へのアンケート（四件法で実施）でも、「①授業が分かりやすい」「⑩児童や生徒に熱心に向き合う」「④コミュニケーション能力がある」などの割合が高く、大学生が抱えているイメージは、実際に教職に就いた学校教員と大きく相違がないことが分かる（図6）。また、「④ICTの活用やプログラミング教育、情報モラルを含めた情報教育の指導力があること」及び「⑧部活動の指導力があること」については、学校教員も教職を志す大学生も必要な資質・能力として判断しているのは少数である。

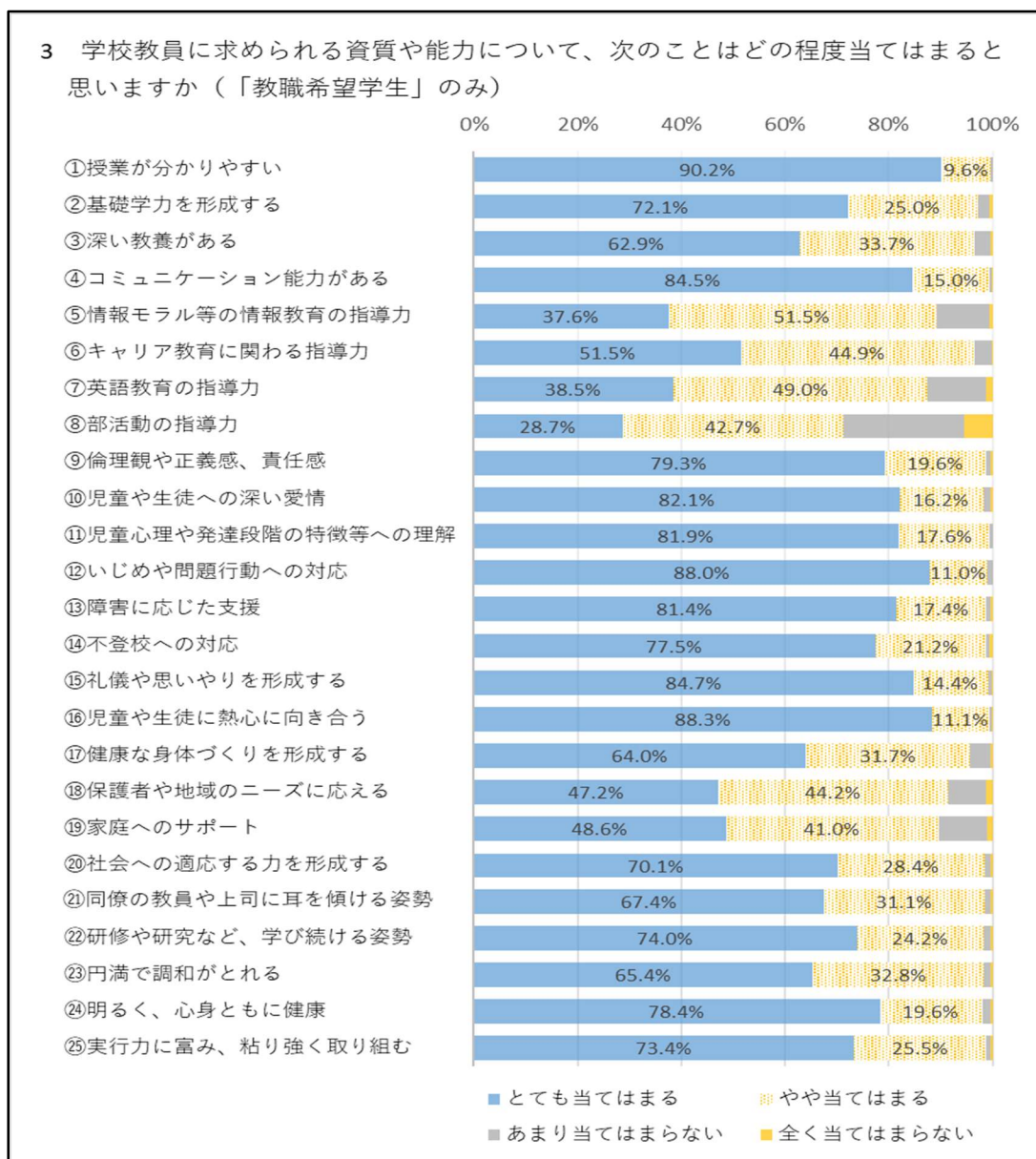
一方で、教職希望学生が学校教員に求められる資質・能力で回答の割合が高かった「⑫いじめや問題行動への対応」や「⑬障害に応じた支援」「⑭不登校への対応」などは、学校教員はあまり回答の割合としては高くない。これは、実際に勤務している学校の実情によるものが大きく、回答が分散したためだと推測される。また、今年度実施した二つまたは三つを選ぶ回答方式は、昨年度の四件法と比較すると項目間の差が際立つ傾向にある。

【図5 「学校教員に求められる資質能力」について回答の割合】761件回答





【図6 「学校教員に求められる資質能力」について「教職希望学生」の回答の割合】792件回答



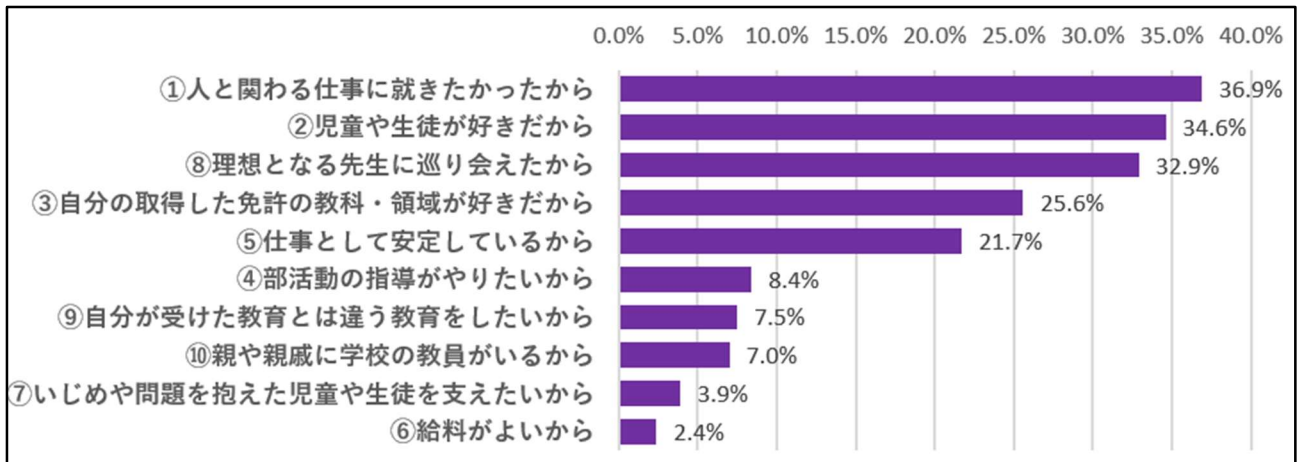
(4) 教職を志すようになった理由

「教職を志した理由」（アンケート5番・選択肢から二つ選択）について、教職の魅力として、どのようなものがあるかを考えていくために回答してもらった。

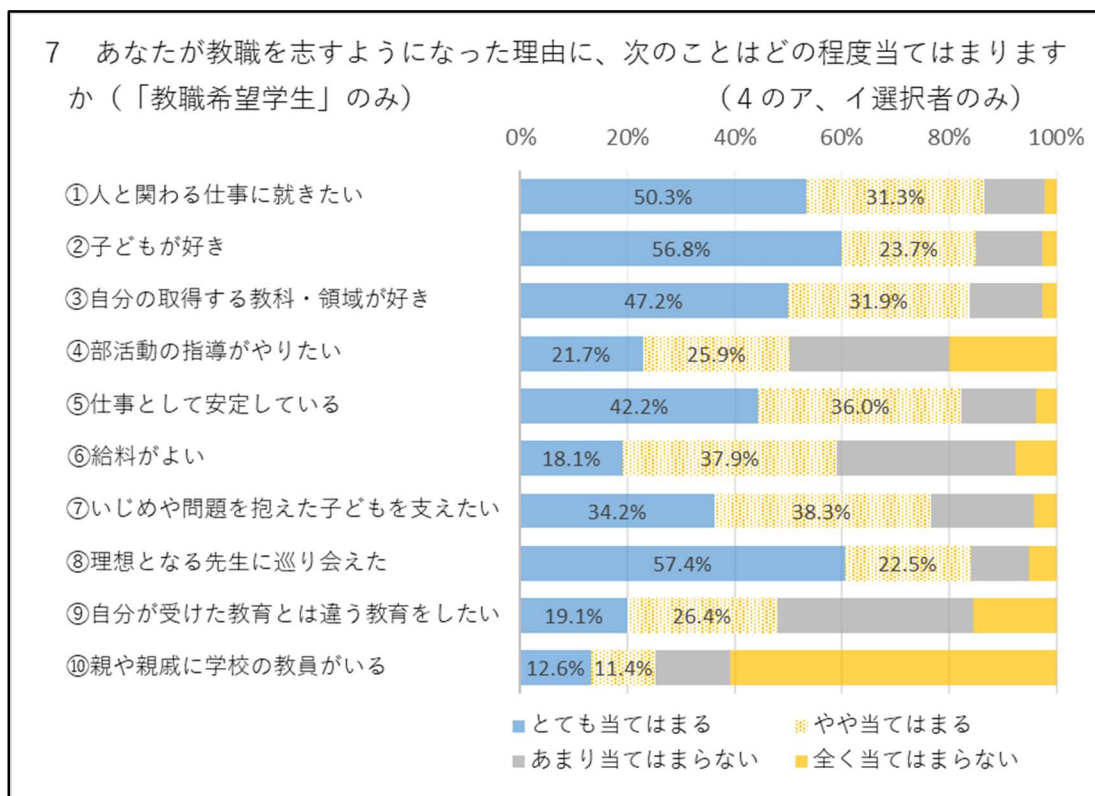
多かった回答から順に並べると「①人と関わる仕事に就きたかったから」「②児童や生徒が好きだから」「⑧理想となる先生に巡り会えたから」である。最も少なかった回答は「⑥給料がよいから」であった（図7）。また、教職希望学生へのアンケート（四件法で実施）でも、「⑧理想となる先生に巡り会えた」「②子どもが好き」「①人と関わる仕事に就きたい」の順に高く、「⑥給料がよい」で「とても当てはまる」という回答率が低いなど、学校教員との相違は見られない（図8）。

また「教職に就きたいと思った時期」（アンケート4番）の回答の割合を見ると、校種によって結果に差があった（図9）。小学校教員は「小学生」の頃に、中学校及び義務教育学校教員は「中学生」の頃に、高等学校教員は「高校生」「大学生以降」に教職に就きたいと思っていることが分かる。このことから、その時期に理想的な先生に出会えたことで教職に就きたいと考えようになった学校教員が多くいることが推測される。

【図7 「教職を志した理由」についての回答の割合】761件回答



【図8 「教職を志した理由」について「教職希望学生」の回答の割合】792件回答



【図9 教職に就きたいと思った時期】761件回答

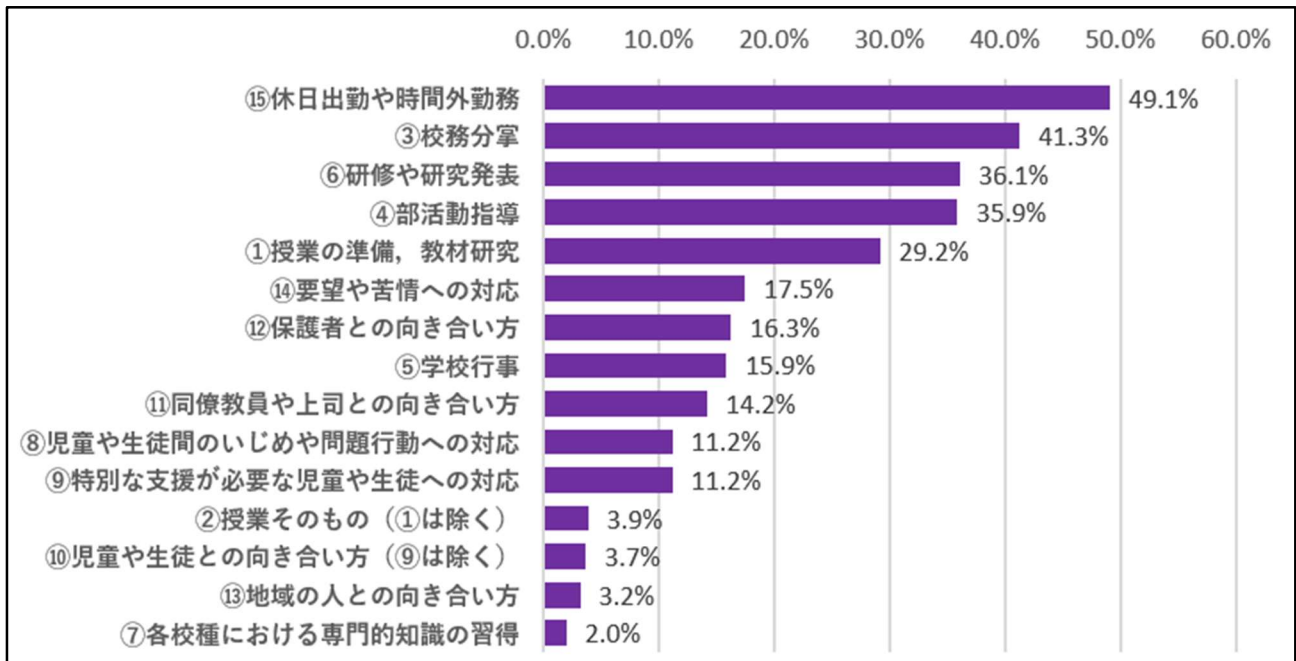
	幼稚園 認定こども園	小学校	中学校 義務教育学校	高等学校	特別支援学校	計
①小学生より前	25.0%	2.0%	1.1%	1.1%	0.0%	1.8%
②小学生の頃	25.0%	34.3%	12.5%	11.6%	16.1%	22.5%
③中学生の頃	8.3%	21.5%	44.0%	21.6%	12.9%	26.4%
④高校生の頃	41.7%	19.5%	20.7%	31.1%	45.2%	24.0%
⑤大学生になって以降	0.0%	22.7%	21.7%	34.7%	25.8%	25.2%

(5) 教職として負担に思っていること

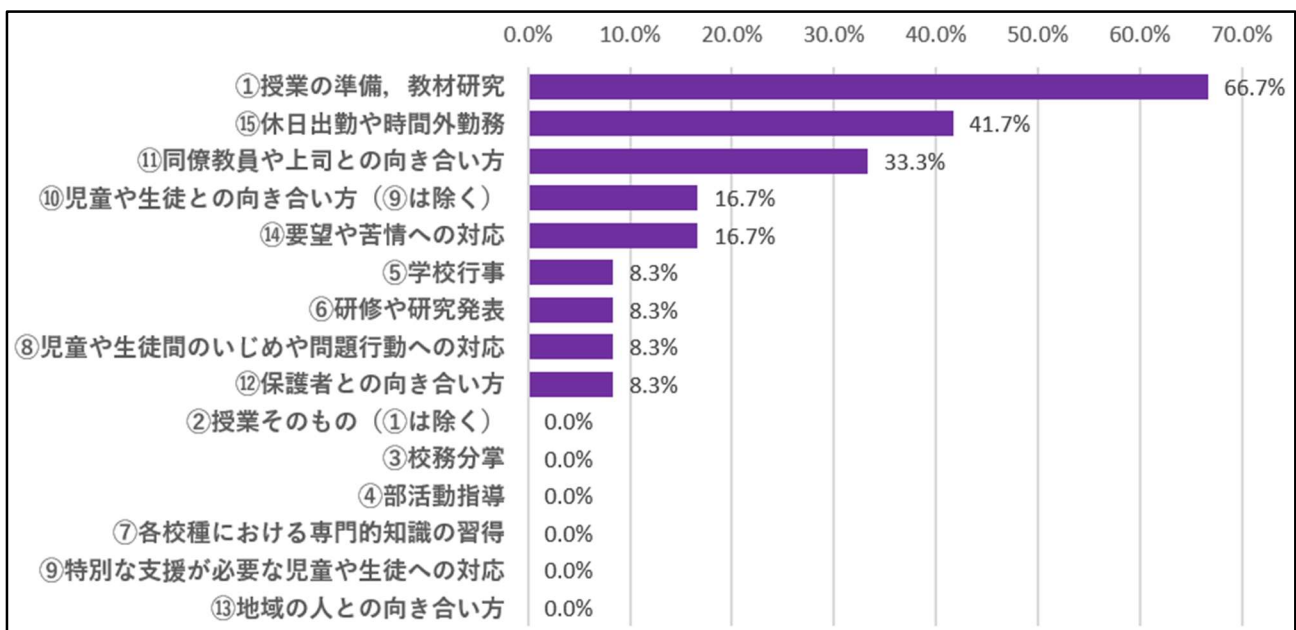
「教職として負担に思っていること」(アンケート6番・選択肢から三つ選択)について、これらを明らかにすることで、どうすれば学校教員の負担感を軽減していくことができるかを考えていくために回答してもらった。

幼稚園、小学校、中学校および義務教育学校、高等学校、特別支援学校の5校種を総括すると図10のような結果となっている。最も多い回答は「⑮休日出勤や時間外勤務」であり、全回答の49.1%を占めている。また、最も少ない回答は「⑦各校種における専門的知識の習得」となった。しかし、校種によって勤務内容が異なる部分もあるため、校種別にそれぞれ集計した(図11~15)。

【図10 教職として負担に思っていること】761件回答

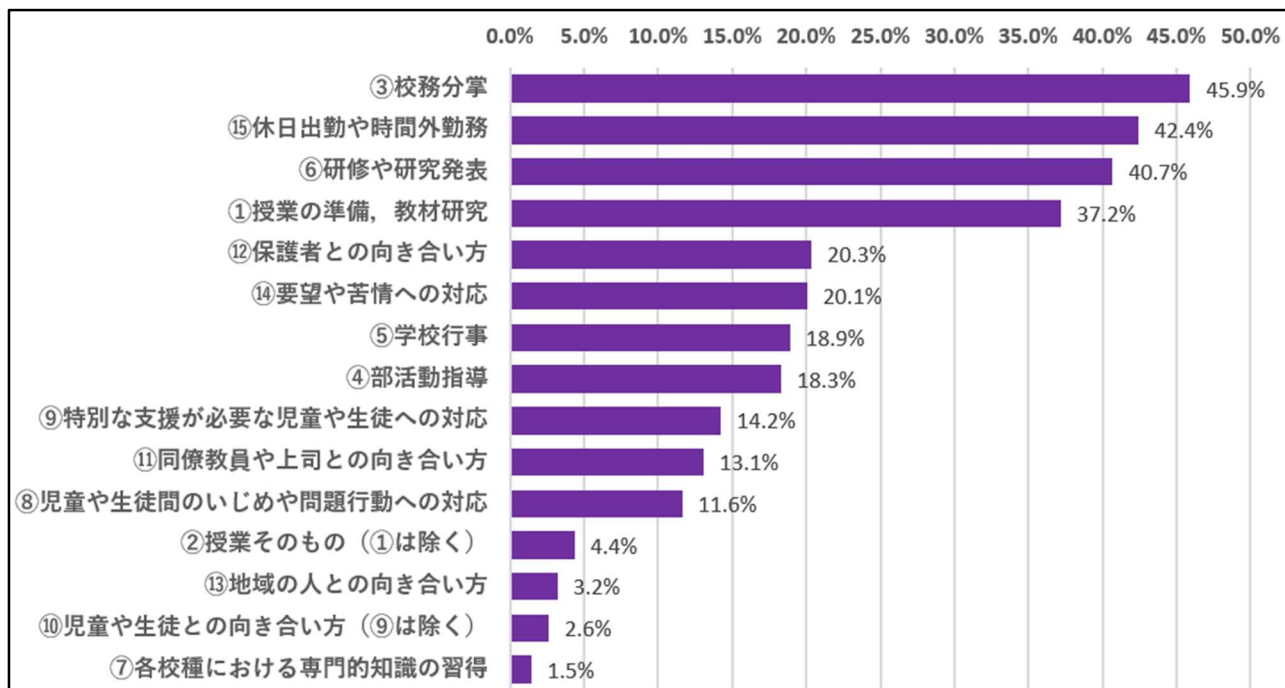


【図11 教職として負担に思っていること(幼稚園・認定こども園)】12件回答



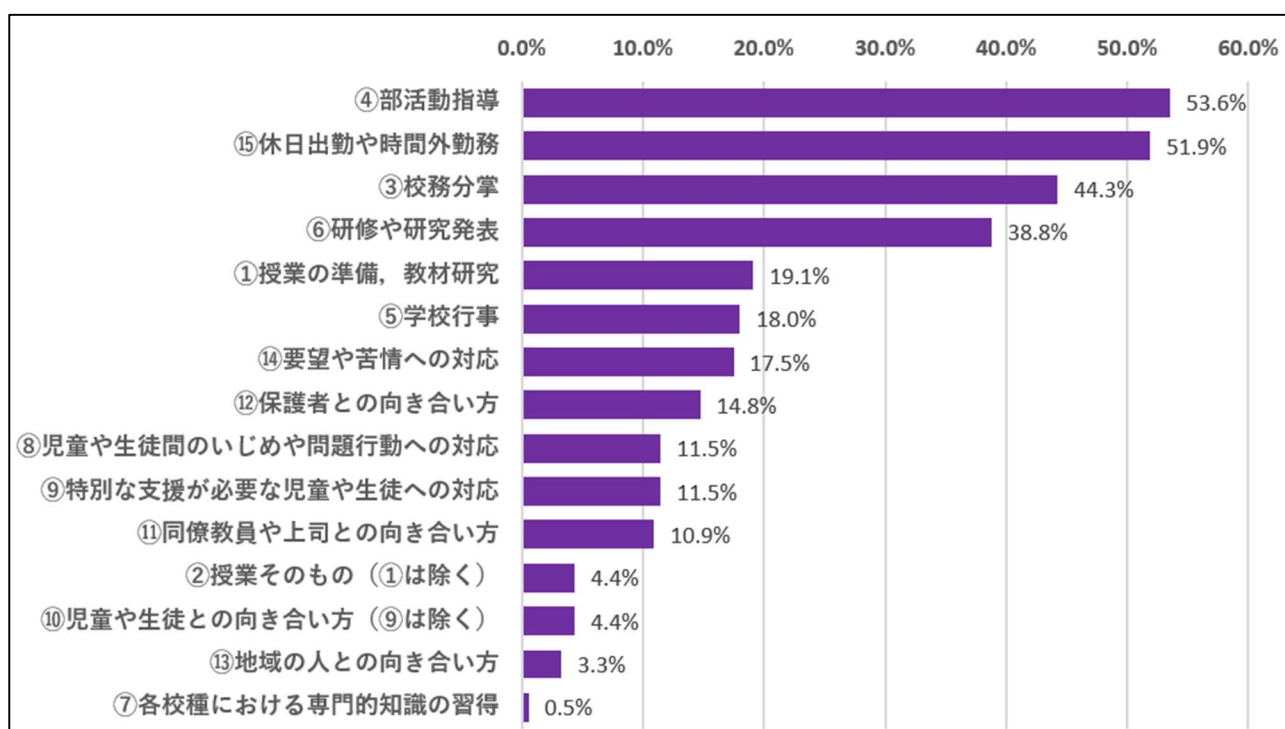
幼稚園及び認定こども園教諭で最も多い回答は「①授業の準備, 教材研究」であり、続いて「⑮休日出勤や時間外勤務」「⑪同僚教員や上司との向き合い方」の順に多い。

【図12 教職として負担に思っていること（小学校）】344件回答



小学校教諭で最も多い回答は「③校務分掌」であり、続いて「⑮休日出勤や時間外勤務」「⑥研修や研究発表」「①授業の準備, 教材研究」の順に多い。

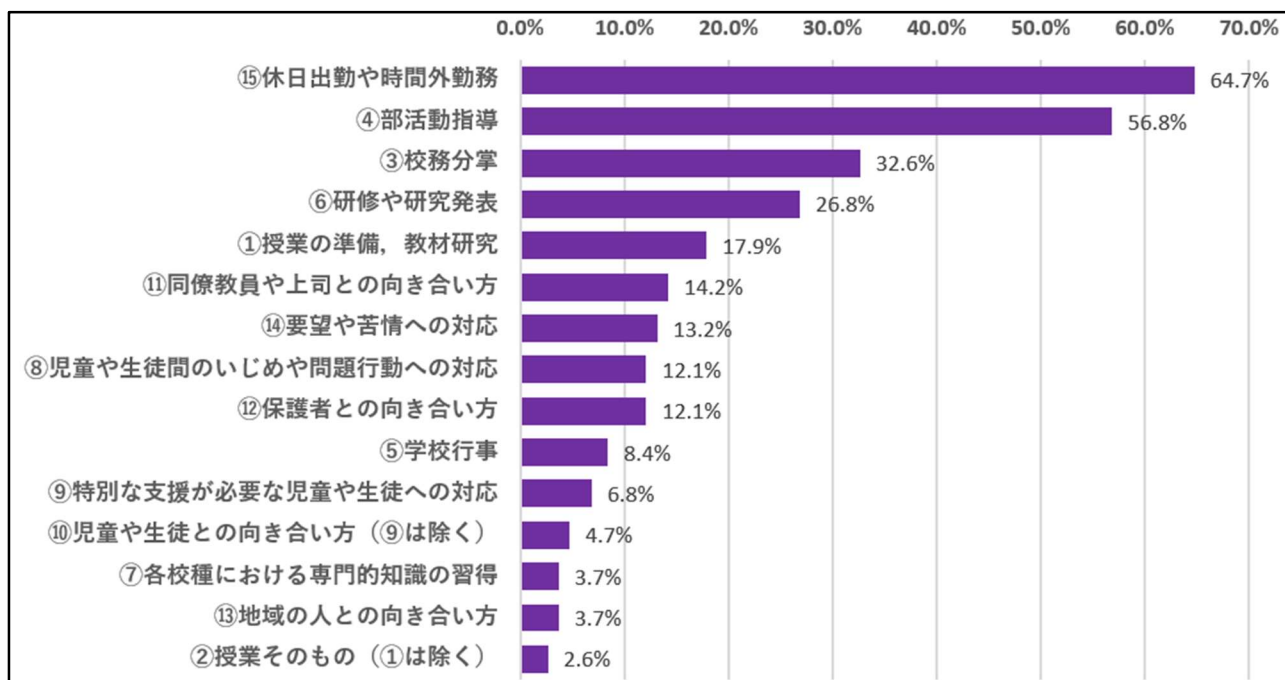
【図13 教職として負担に思っていること（中学校・義務教育学校）】184件回答



中学校教諭及び義務教育学校教諭では「④部活動指導」が最も多い回答となる。続いて「⑮休日出勤や時間外勤務」「③校務分掌」「⑥研修や研究発表」の順に多い。小学校教諭と比較すると「①授業の準備, 教材研究」の割合が小さくなるが、それだけ部活動指導に対する負担が大きいということが推測される。

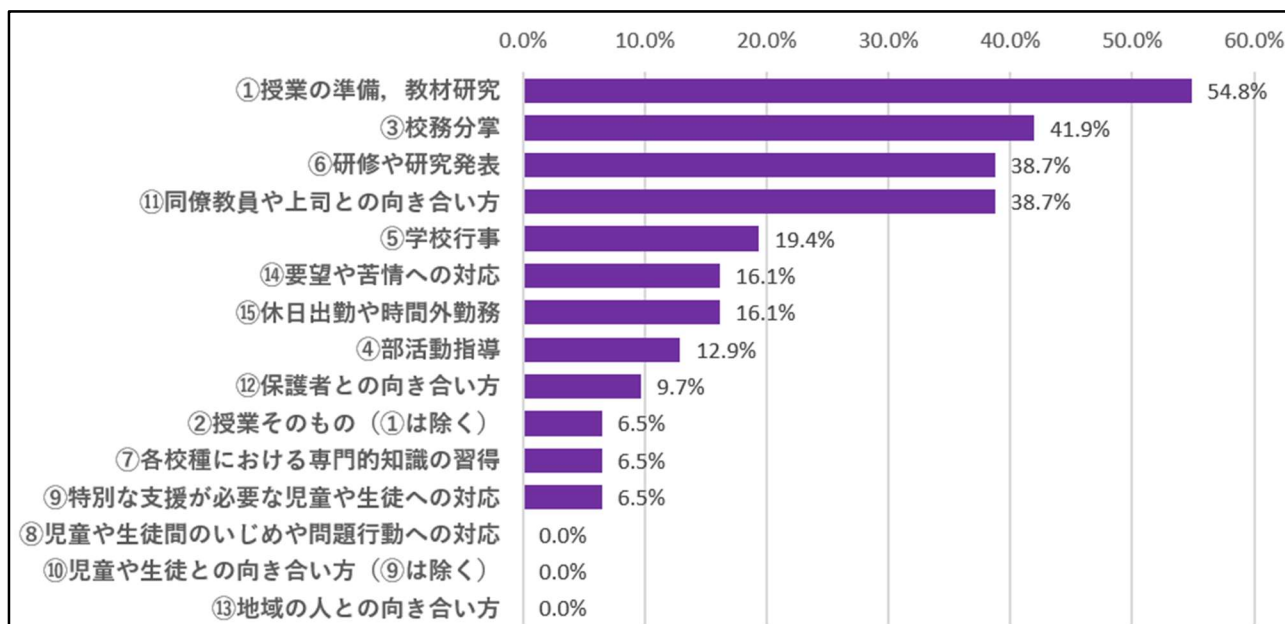


【図14 教職として負担に思っていること（高等学校）】190件回答



高等学校教諭では「⑮休日出勤や時間外勤務」が最も多い回答で、続いて「④部活動指導」となっている。上位二つの順は逆になっているものの、三位以下も含めて中学校及び義務教育学校教諭と傾向が似通っていると言える。

【図15 教職として負担に思っていること（特別支援学校教諭）】31件回答



特別支援学校教諭で最も多い回答は「①授業の準備, 教材研究」であり、続いて「③校務分掌」「⑥研修や研究発表」「⑪同僚教員や上司との向き合い方」の順に多い。

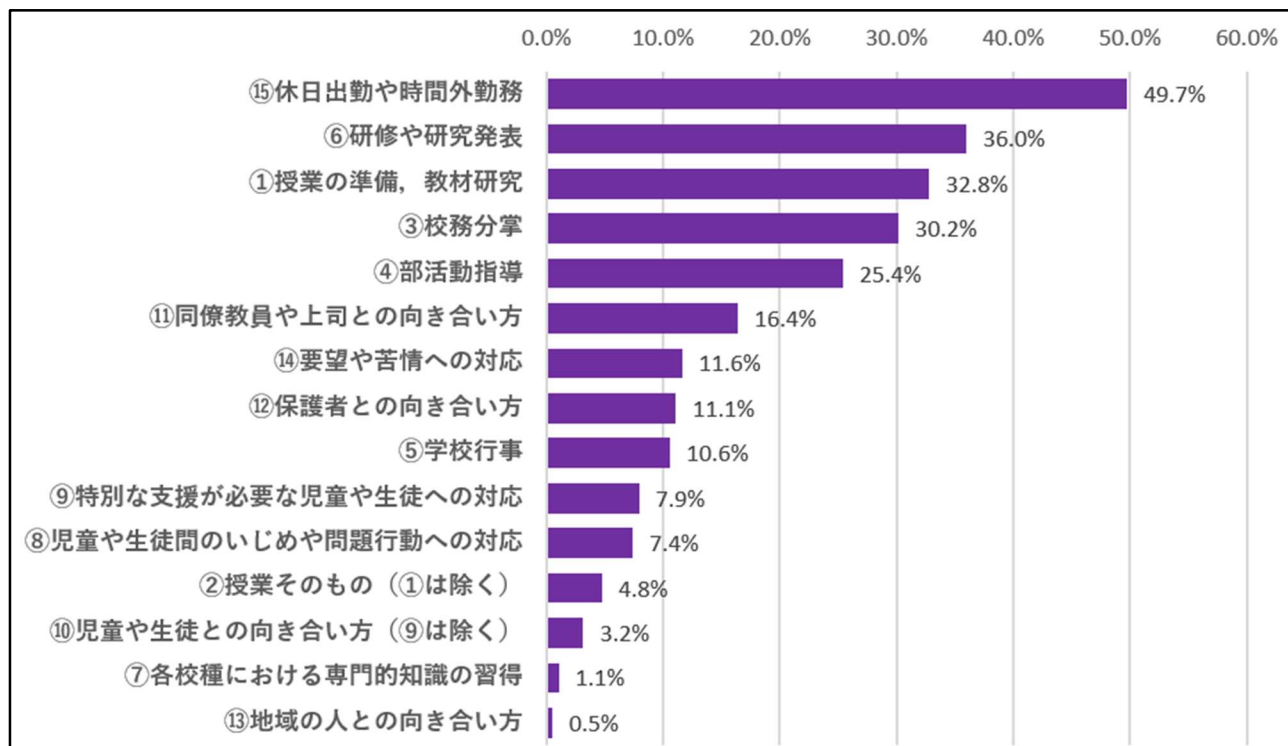
校種によって回答にばらつきがあるものの、「⑮休日出勤や時間外勤務」を負担に思っている教員が多いことが分かる。「⑥研修や研究発表」に関しては、小学校教諭や特別支援学校教諭は負担に感じているが、高等学校教諭はその機会が少ないため負担に感じているという回答は比較的少ない。また「④部活動指導」に関しては、中学校教諭および高等学校教諭で負担に感じているという回答が多い。

「③校務分掌」に関しては、どの分掌を担当しているかによっても回答が異なるため校種別の傾向に特徴があるとは言い難いが、小学校教諭で多くの回答が見られた。

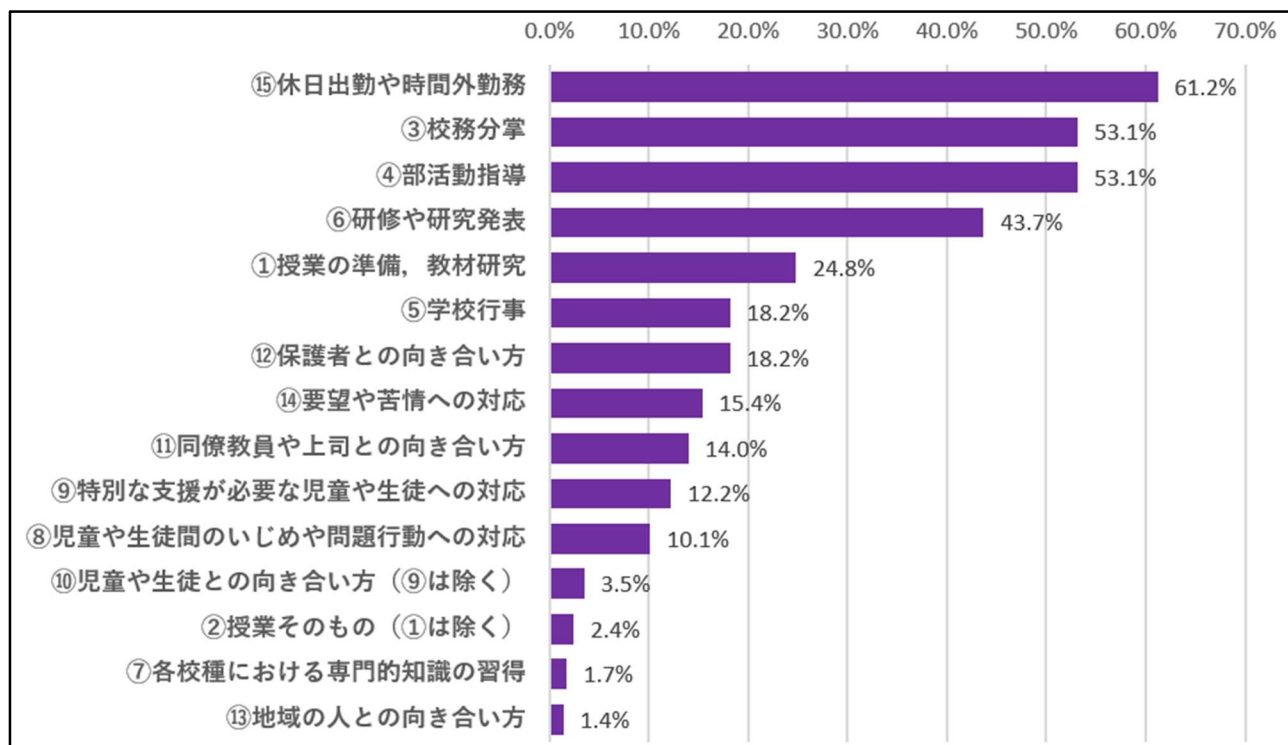
このように、教職として負担に思うことは、校種によって異なることが明らかになったと言える。

次に、経験年数によって教職として負担に感じるものが異なる可能性もあるため、経験年数別に集計をした（図16～18）。

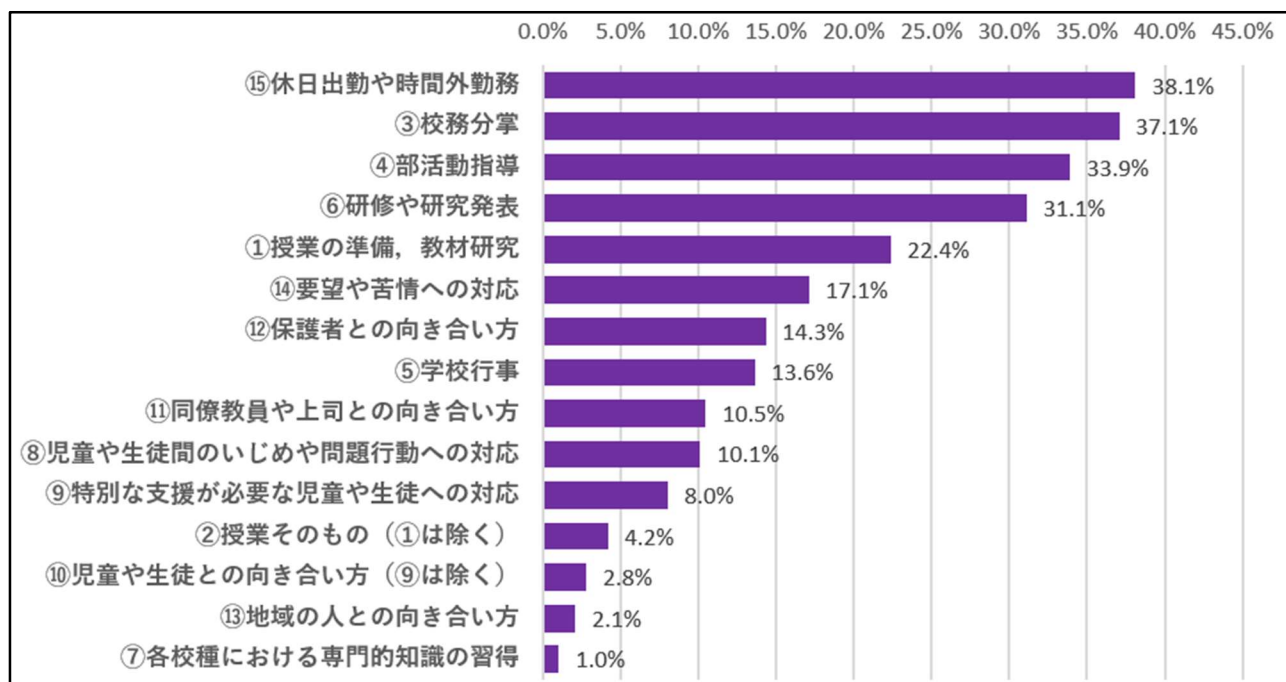
【図16 教職として負担に思っていること（1年目教員）】189件回答



【図17 教職として負担に思っていること（2年目教員）】286件回答



【図 18 教職として負担に思っていること（3年目教員）】286 件回答



「⑮休日出勤や時間外勤務」を負担に思っている教員が多いのは、1年目から3年目までの全てに当てはまる。1年目と比較すると、2～3年目では「③校務分掌」という回答が多くなり、「①授業の準備, 教材研究」の回答が少なくなる。前述した通り、「③校務分掌」に関してはどの分掌を担当するかによっても負担は異なるが、2～3年目になると校務分掌で任される仕事が増えるため、負担と感じる回答が多くなるのは整合性があると言える。「④部活動指導」に関しては、校種によって負担と感じる割合は異なるが、中学校及び高等学校教員では、1～3年目のいずれにしても回答の割合が高い。

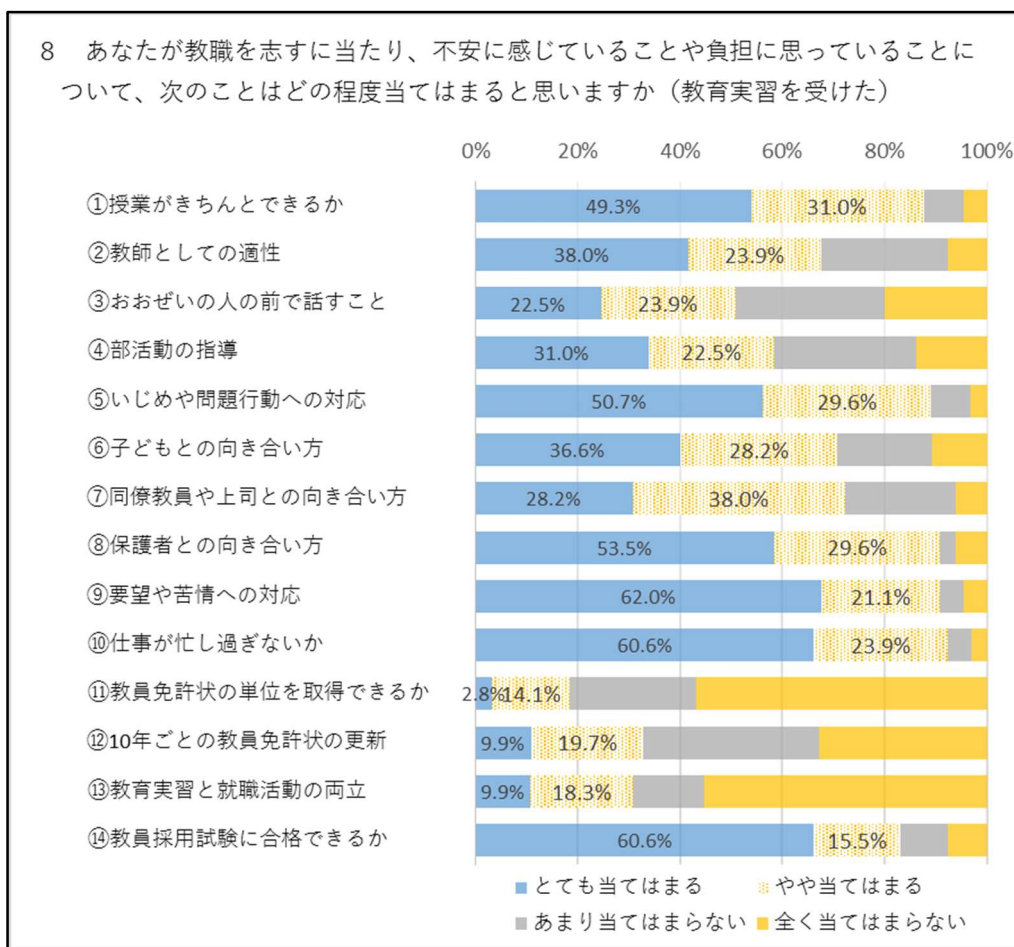
次に、教育実習を経験した大学生が「不安に感じていること、負担に思っていること」（四件法）の回答の割合では、「⑭教員採用試験に合格できるか」を除くと、「⑨要望や苦情への対応」「⑩仕事が忙し過ぎないか」の割合が高かった（図19）。教職に就く前に「⑩仕事が忙し過ぎないか」について、不安に感じている割合が高かったが、実際に教職に就いている学校教員の回答でも「⑮休日出勤や時間外勤務」「④部活動指導」「③校務分掌」などの割合が高いことから、教員の魅力向上のためには、教員の仕事量及び負担の軽減は喫緊の課題であると言えるのではないだろうか。

#### (6) 教職の魅力について

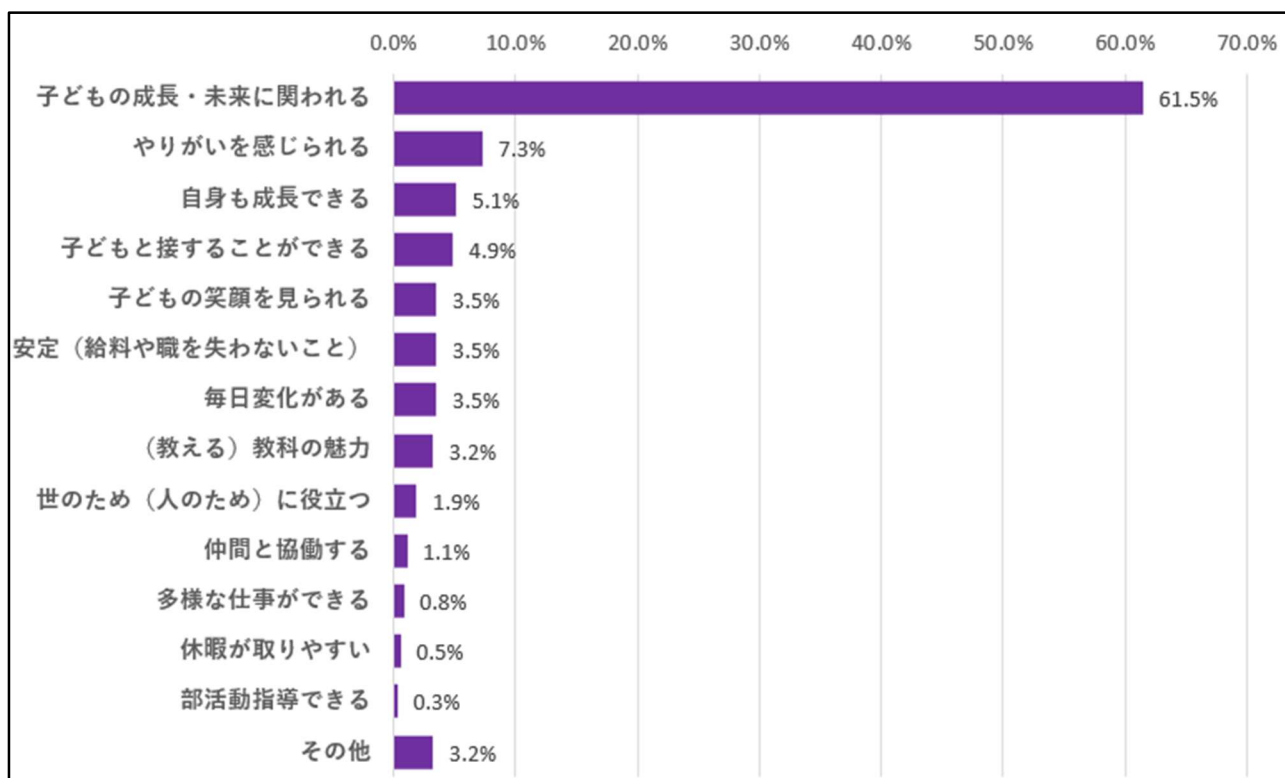
「教職の魅力は何だと思いますか（任意回答）」（アンケート10番・自由記述）について、学校教員が考える教職の魅力とは何かについて自由記述で回答を求めた。記述内容から分類したところ「子どもの成長や子どもの未来に関われるところ」という回答が最も多く、全回答の約60%を占めた（図20）。それ以外の回答に関しては分散しており、給与などの待遇面や、教科そのものの魅力などの回答は比較的少ない。

アンケート1番の「魅力のある仕事」について、「①人のためになる仕事」「⑪人と接する仕事」について回答の割合が高かった。このように、学校教員が感じる教職の魅力とは「人のためになる」「人と接する仕事」であるが、アンケート6番の「教職として負担に思うこと」の回答の割合が示すとおり、「時間外勤務」「校務分掌」等、「子どもと向き合う時間」以外のことに多くの時間が割かれることが、教職としての負担に感じられているのではないか。

【図19 「不安に感じていること，負担に思っていること」について  
「教育実習を受けた」学生の回答の割合】87件回答



【図20 「教職の魅力は何だと思うか」についての回答の割合】371件回答

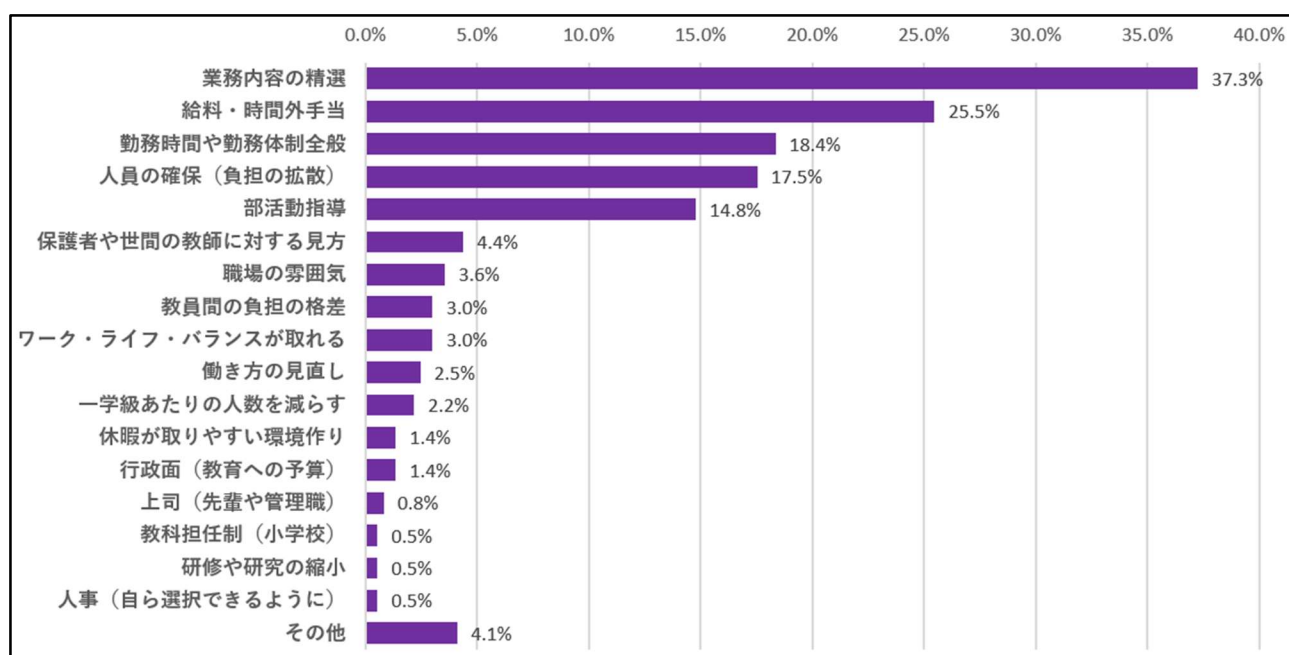




#### (7) 何が変われば、教職により魅力を感じるか

「教職自体または教職を取り巻く環境の何が変われば、あなたは教職により魅力を感じますか（任意回答）」（アンケート11番・自由記述）」について、教員が何を求めてほしいと願っているのかについて自由記述で回答を求めた。記述内容から分類したところ「業務内容の精選」という回答が最も多く、続いて「給料や時間外手当」「勤務時間や勤務体制全般」「人員の確保（負担の拡散）」という回答が多かった（図21）。これらの回答は全てが絡み合っており、人手が足りないから一人一人の負担が大きいこと、全ての業務に手が回らなくなるために「業務内容の精選」が必要であり、同時に一人一人の負担が大きいために「勤務時間内」に仕事が終わらず、「休日出勤や時間外勤務」で補う必要に迫られるのではないだろうか。その負担感が「給料や時間外手当の適正化」という回答にも表れているのだと思われる。

【図21 「何が変われば、教職により魅力を感じるか」についての回答の割合】365件回答



## 4 おわりに

教職を取り巻く環境をどのように改善することで、教職の魅力が上回るかをアンケート結果から検討し、次のようなことを提案する。

一点目は、働き方に対する環境の整備である。教職に対する魅力は感じているものの、「休日出勤や時間外勤務」「校務分掌」「部活動指導」などに負担を感じている教員が多くおり、また「業務内容の精選」や「人員の確保」を願っている学校教員が多くいる。このことから、学校での人員を増員したり、業務内容の精選を行うことで、児童・生徒と向き合える時間を確保できるようにしたり、部活動の指導では外部人材を活用したりすることで、教員への負担を分散及び軽減できるよう、労働条件の整備を行政としても取り組んでいく必要がある。

二点目は、教職の魅力を発信し続けることである。「理想の先生と巡り会う」ことが教職に就きたいと考えるきっかけになった学校教員が多くおり、また教職に就きたいと思った時期から、小中学校及び高等学校では、その時期に過ごした環境が大きく影響しているとも推測できる。学校の先生たちが生き生きと授業を行い、子どもに寄り添い支えていくことが、その姿を見た児童生徒たちにとって教職が魅力ある職業と感ずることに繋がるのではないだろうか。また、ベテラン教員及び中堅教員たち

が、生き生きと働く姿を見せることが、若手教員にとっての「教職の魅力」や「働きがい」に大きく影響を与えることにもなる。

当センターでは、行政には労働環境の改善や働き方改革の提案、大学には教職の現場への体験の機会の増加、小・中・高等学校にはアンケート結果の共有を行うような施策を引き続き、検討していく予定である。また、先生方のエネルギーを補充できるような研修や研究の実施、大学へ出向いて、大学生に教員の仕事のやりがいや正しい知識についての講義や講演、教職の魅力向上のためのアンケートを継続して実施し、教職の更なる魅力向上を目指していきたい。